

國學院大學學術情報リポジトリ

〔学生懸賞論文発表〕 選評

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: [國學院雑誌編集委員会] メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/402

学生懸賞論文発表

選評

第一部門 (本学文学部・神道文化学部学生、別科在籍者)

佳作

田子 晃矢 (文学部史学科三年)

清代中期における書院の「官学化」と科道官

鈴木健多郎 (神道文化学部神道文化学科三年)

『仏度伝』に見る内山真龍の神観と仏教観

第二部門 (本学大学院文学研究科・専攻科在籍者)

佳作 〓 本誌九月号掲載予定 〓

山口 祐樹 (文学研究科博士課程後期二年)

古代伊勢神宮祭祀と大神宮司

(所属・学年は、応募当時)

田子 晃矢 (文学部史学科三年 〓 平成二十九年年度)

清代中期における書院の「官学化」と科道官

明末に政治批判の一拠点となったこともあり、明末から清初にかけて書院の設立は抑制されたが、雍正十一年(一七三三)の書院設立の勅諭を契機に、府州県学の有名無実化もあって、清朝における官僚養成の教育の中心は書院へ移行していく。著者はこの点に着目して、清代中期の書院の諸側面を明らかにしようとする。

先行研究によって、乾隆期(一七三六～一七九五)の湖南省の岳麓書院の院長が進士出身地者であることが明らかにされているが、著者は表一「清代中期・岳麓書院院長名簿」を作成して、当該院長が乾隆初期以降全員進士であること、「翰詹科道」出身者が多数を占めること、その任期には統一性が無いこと、などを指摘する。そして、院長の資質から書院の性格を攻究することに焦点を定め、書院院長の昇任人事に関連して科道官(六科給事中・各道監察御史)の存在に注目する。そこから、科道

官を経て岳麓書院院長なつた羅典を取り上げ、彼の経歴から清代中期における書院の性格の一端を明らかにしようとする。

初めに広東省の粵秀書院について、陞任条件を満たしているにも関わらずそれが適わない人員を、乾隆帝が院長に登用するように求めていたことを指摘し、これは湖南省の岳麓書院でも同様であつたとする。そして、昇進の停滞の解消のために官僚の書院院長への転用があつた、とする。そして、その一例として鴻臚寺少卿の肩書を持ちながら、二十七年間岳麓書院院長を務めた羅典の閲歴を確認することで、清朝における官僚の昇任の停滞の状況とその緩和策の一例としての書院院長の在り方を明らかにする。

紙数の関係でこれ以上の紹介は割愛するが、清朝官僚の昇任に関わる問題を明らかにするうえで、書院の存在に着目した点をまず評価したい。昇進の停滞に関する官僚の不満の解消はいつの時代にも切実な問題であるが、儒教思想から孝を重視する中国では、親の介護や葬儀のために一時的に官を離れるケースも多く、その事が官僚の昇進に関する事情を複雑にした。著者は羅典の事例に注目することで、その事情の一斑を明らかにするとともに、乾隆帝期の書院の実情の一面も明らかにしている。先行研究としても日本人の論文のみならず、中国人による

中国語の論文も参照しており、史料としても『大清会典事例』『粵秀書院志』等の清朝の典籍も用いて、その努力は多とすに足る。書院と科挙との関係はどうか、同時期の府州県学の在り方はどうか等の、様々な形で比較し得る論点はいろいろと考えられるが、そうした論点の新たな展開は今後に期待すべきであろう。清朝の漢文は読みにくく、著者の読み方が正しいかどうか疑問無しとはしない。しかし、大学三年生の段階でこのような問題に取り組み、しかも一定の説得性のある論文に仕上げた点で、本稿を高く評価することができる。

鈴木健多郎（神道文化学部神道文化学科三年Ⅱ平成二十九年度）

『仏度伝』に見る内山真龍の神観と仏教観

この論文は、江戸時代に遠江国で活躍した学者内山真龍を論じたものである。著者は、真龍に関する先行研究をふまえて、従来思想面についての研究が手薄だったという認識に立ち、真龍の著作の読解によって思想研究へと踏み出す。具体的対象として『仏度伝』を選び、そこに表れる神観念と仏教観について論じている。

神観念の検討では、その基礎に据えられる「心柱」という概念が、禪や神道に関係付けられつつ、特定の宗教の枠組みを超越した尊崇対象ないし道徳的な対象である可能性を指摘する。そして、真龍の神観念に関する記述が本居宣長の神観念の影響を受けたと推測される箇所が多いとして、『仏度伝』と宣長の『玉くしげ』や『直毘霊』を比較・検討している。次に仏教観については、まず、『仏度伝』で仏教を批判する基点として持戒が重視されていることを指摘し、上代日本の国風の記述が見られるものの、それを称賛・礼賛する姿勢は賀茂真淵や宣長に比して薄いと論じる。そして、『仏度伝』では達磨大師の教えや禪の教説が「心柱」だと把握されていると述べ、達磨大師が戒の面で高く評価され、またそれを基点として同時代の仏教が批判されていることを考察して、論を終えている。

全体として、『仏度伝』をていねいかつ正確に読解しようとする本論文の態度は高く評価でき、テキストの一文一文をおろそかにしない論考も堅実なものである。また、いずれの論点も新しい着眼によるものである。

その上で今後の課題を指摘するならば、論文全体が『仏度伝』についてのやや逐条的な検討になっている点があげられよう。神観念については宣長の論との比較が中心をなしているが、宣

長の神観念の体系的なあり方については先行研究の蓄積もあり、本論文が課題とする真龍との比較においても、それらを踏まえた宣長の神観念の包括的な把握が前提となるだろう。また、本論文は、真龍による仏教批判の重要な基点を戒に認めるが、近世仏教において戒律復興が重要な問題となっていたことはこれまで日本思想史において半ば常識化しており、真龍による戒への注目を評価するにあたっては、やはり近世仏教史の研究蓄積を参照し、そのより広い文脈について、直接的な言及はせずとも、顧慮した上で考察する必要があると思う。

近年、近世史の分野では、地域に根ざした人々について読書行為や書物収集を社会的に考察する研究の進展が見られる。地域への注目という点では、国学研究ではこれらより早く、戦前から国学者の地域性に焦点をあてた研究成果があるが、学問がその地域で具体的に展開した様子を分析することで近世の知のありようを考えようというのが最近の近世史の問題関心である。このような研究動向にも接続しつつ、具体的な実証・考証の歩みをさらに進めることを、著者には期待する。